

生理人類学体系化の試み 実験生理人類学と理論生理人類学の視点から

宮崎 良文 ((独)森林総合研究所 樹木化学研究領域 生理活性チーム)

【概要】

本研究の目的は、実験生理人類学によって新たに蓄積される実験データやこれまでに蓄積されてきた研究成果に理論生理人類学という新たな考え方を導入し、両者の融合から生理人類学を体系化することである。5年間の研究期間内に、実験生理人類学においては、生理人類学のキーワード(生理的多型性、全身的協関、機能的潜在性、テクノアダプタビリティ、環境適応能)を柱にしたデータを蓄積し、作用メカニズムの解明に努める。脳機能計測に関しては、時間分解分光連続測定システム等を用い、自律神経活動連続計測に関しては血圧、脈拍数等を用いる。さらに、唾液中のコルチゾールと免疫グロブリンの計測を実施し、すべての指標において絶対値計測を行う。理論生理人類学においては、キーワードを念頭において、遺伝子型、環境・文化、表現型の関係に関するモデル化を行う。加えて、生理人類学の考え方や方法論を構築することによって、生理人類学の体系についての提案を行う。実験・理論生理人類学という観点から生理人類学の体系を構築し、生理人類学という学問の新たな展開に貢献することを目指す。

【期待される成果】

現在に至るまで、生理人類学体系化の試みは実施されておらず、生理人類学のキーワードを明確に意識した研究は極めて少ないのが現状である。このような状況の中、実験生理人類学ならびに理論生理人類学という観点から本学問の大系化がなされた場合、生理人類学が再構築されることが期待される。その結果、1) 生得的要因である遺伝子型、2) 環境や文化による修飾ならびに3) その修飾の結果としての表現型の関係が明らかになり、人間自体の理解が深まる。

【関連の深い論文・著書】

R. Mishima, Y.Tsunetsugu, Y.Miyazaki, Y.Yamada et al.

Effects of sounds generated by a dental turbine and a stream on regional cerebral blood flow and cardiovascular responses.

Odontology 2004 in press

Y.Tsunetsugu, Y.Miyazaki and H.Sato

The visual effects of wooden interiors in actual-size living rooms on the autonomic nervous activities.

J of PHYSIOLOGICAL ANTHROPOLOGY and Applied Human Science. 21 (6) 297-300 2002

【研究期間】 平成 16 ~ 20 年度

【研究経費】 78,900 千円

【ホームページ】 <http://www.ffpri.affrc.go.jp/labs/kassei/>